

平成 29 年度 県民の環境活動支援事業

ちば里山カレッジ「第 2 回フォローアップ研修」実施報告書

特定非営利活動法人ちば里山センター

題 名	ちば里山カレッジ「第 2 回フォローアップ研修」 講 義「里山活動とキノコ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡 治幸 講 義「里山活動におけるキノコ栽培」 講師：千葉県森林インストラクター会 鶴見 治 観察会「里山の野生キノコ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡 治幸 フィールドアシスタント：NACS-J 自然観察指導員 石松 成子
日 時	平成 29 年 10 月 14 日（土） 9：00～15：45
会 場	千葉市 昭和の森&緑公園緑地事務所 会議室
出席者	受講生 14 名（10 市）・講師 4 名・スタッフ 2 名
内 容	9：00～10：20 講 義「里山活動とキノコ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡 治幸 10：30～12：00 講 義「里山活動におけるキノコ栽培」 講師：千葉県森林インストラクター会 鶴見 治 13：00～15：45 観察会「里山の野生キノコ」 講師：千葉県菌類談話会 降幡 治幸 フィールドアシスタント：NACS-J 自然観察指導員 石松 成子
報 告	講義「里山活動とキノコ」 ・降幡講師は、キノコの同定は難しい、キノコに関する迷信の払拭、キノコによる中毒事例について、実物を全員で観察しながら学習を進めた。 ・ウラボニホテイシメジ（通称＝イッポンシメジ：食）と間違えてクサウラボニタケ（毒）を食したため、例年、中毒事例が発生する。午後の観察会では、採取したクサウラボニタケと比較して、キノコの着眼点を学んだ。 ・キノコは世界で 3 万種が確認され、日本では 1 万種ある。そのうち名前が特定できるものは 2,000～3,000 種で、残りは特定が難しい。形状や胞子を頼りにしても、判別がつかないものが多いということのようだ。 ・タテに裂けると食べられる、茄子と一緒に煮れば食べられる、などは迷信で、地域で食べられているキノコ以外には手を出さないほうが良いことを確認した。 ・スギヒラタケのように、それまで可食とされていたキノコが有毒指定されるなど、情報の更新が頻繁なものキノコの特徴で、図鑑は最新のものを準備するのが肝心だが、とはいえ、成長によって形や色が変わるエノキタケのようなキノコの例もあることから、図鑑にだけ頼って判断を下すのも控えたほうが良いことも強調した。 ・里山では、食べられるキノコでも、生で食べるのは避けて、熱を通して、おいしく食べて、楽しんでほしいと結んだ。

講義「里山活動におけるキノコ栽培」

- ・鶴見講師は県職員の頃から、シイタケ栽培の普及に当たっていた経験を持つ。講義では、シイタケ栽培におけるポイントをキーワードで浮かび上がらせ、受講生にわかりやすい講義を行った。
- ・伐採時期は7分紅葉、里山活動にふさわしい種駒は290。植菌の奥義は菌が呼吸する空間を作る。シイタケ菌の陣取り合戦。6乾4湿（人が快適と感じる環境）などだ。
- ・玉切りから始まり、発生までのシイタケ栽培は、楢木の水分や光の調整が収穫量につながる大事な要素だと理解できた。
- ・受講生から、マテバシイの楢木について質問があり、収穫量が多いが、樹皮が剥げやすいので楢木の寿命は短いと回答があった。

観察会「里山の野生キノコ」

- ・午後は昭和の森四季の道に沿ってキノコを観察・採取した。
- ・観察に出かける直前、管理棟の前の植え込みで、降幡講師が「こんなところにも」と指さした斜面に目を凝らすと、所々にキノコが発生していた。目が慣れるとキノコが見つかることに衝撃を覚えた。
- ・ノボリリュウ、アセタケ、ホコリタケの一種、クサウラベニタケ、ガンタケ、ドクツルタケ、ヒロタケ、サクラタケモドキ、シラホウキタケ、シラコタケ、コタマゴテングタケ、コフキササルノコシカケなどが採取できた。
- ・午前中に学習したクサウラベニタケとウラベニホテイシメジの実物を比較し、その姿・形があまりにも似ていることに受講生も驚きを隠せないようだった。
- ・採取できたキノコのうち同定できたのは1割くらい。残りは〇〇属、〇〇の一種という区切りになった。キノコの同定の難しさが明らかになった。

添付資料（写真）



降幡治幸講師



受講生のみなさん



においを嗅いでみる



大きなウラベニホテイシメジ



鶴見治講師



植菌について説明



管理事務所前で見つかりました



キノコを採取



ドクツルタケでしょうか



ホウキのようにも見えます



採取したキノコ



何キノコでしょうか？